

interview



審査委員長
早稲田大学 教授
古谷 誠章

普段学生が学校で取り組む課題は、実在する場所であっても、プロジェクトそのものは架空。だから、設計したとしても相手は実在しません。しかし、実施につながる設計となると、対象の場所があって、そこに暮らす人たちがいます。具体的に目に見える相手がいると、リアリティが全然違うんですね。だから、このコンペは学生にとっては貴重な機会だったと思います。学生からとても熱気を感じました。

最優秀賞のチームは、西浦に足を運び、何人もの地元の人に話を聞き、西浦についていろいろ調

べました。そして、その内容を咀嚼し、想いを全力投球してくれて、地元の人たちの期待を担っているように感じました。これはリアルだからできることであり、こういったコンペの大きな意義です。

今回は全国の学生から応募があり、地元の人では気づかないような着眼点がたくさんありました。その地域のことをよく知らないからこそ気付くことがあるんです。地元の人にとっては、良い気付きになったのではないかなと思います。

同じ電車を使っている、知らない人同士が電車の中で触れ合うことはありません。しかし、待合所には滞留の余地があり、乗り降りする駅が同じであれば、そういう人たちの接点を生み出すことができます。また、電車の乗り降りだけでなく、そこで何かやっているから行こうとかそこで会おうとか、待合所が目的地となって、人と人とのつながりを作ることができます。新しくできる待合所は、それらが叶えられる場所にきつとなると思います。

